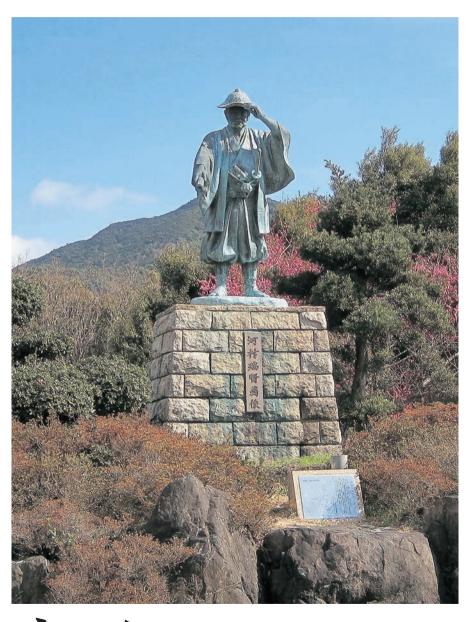


商人をえた、河村瑞賢



南伊勢町教育委員会

河村瑞賢の発行によせて

南伊勢町長 小 山 巧

十三歳で南伊勢町の東宮から江戸へ旅立った河村瑞賢は、 知恵と努力によって多くの困難を

克服してきました。

の整備や、領民の安全、農地の安定のための安治川など畿内の治水工事という大事業を完成さ東北の米を効率よく江戸へ運ぶための日本の航路の刷新ともいえる東廻り航路・西廻り航路 せるなど、 の思いに耳を傾け長所を生かす感受性豊かな人柄、何事にも挑戦する勇気や、人一倍努力を 人々の絆に彩られた美しい町です。 瑞賢が、 みなさんが生まれ育った南伊勢町は、 努力から知恵を生み出せられる豊かな心の持ち主だったからだと思います。 現在の東京や大阪などが大いに栄えるもとを作りました。まさに日本の偉人です。 多くの偉業を成し遂げられたのも、 いまも緑濃い山々と穏やかに広がる青い海、 親兄弟やふるさとを想う温かい心、 関わる人々

ふるさと学習に取り組むみなさんを見ていると、このまちから第二、第三の瑞賢が生まれるの ではないかと感じます。 瑞賢が江戸に旅立った当時と変わらぬであろう豊かな自然と人情あふれる南伊勢町の中で、

豊かな心を原動力に、立派な人柄の瑞賢のような人になってくれることを強く期待いたします。みなさんもふるさと南伊勢に誇りを持ち、大いなる夢と、何事にも挑戦する勇気と、感受性

平成三十年二月四日

河村瑞賢の改訂にあたって

南伊勢町教育長 片 山 嘉 人

業に取り組んでいただいております。 ○年を迎えます。本年度、町内では瑞賢生誕四○○年を記念して、官民をあげて様々 三十年(二〇一八)二月十五日に本町出身の日本の偉人である河村瑞賢の生誕から な事

学習の充実を図るため、子ども達が生誕地をはじめ瑞賢ゆかりの地を訪ね、感想や考えをまと 教育委員会としても河村瑞賢生誕四○○年記念事業の一環として、ふるさと教育の中で ふるさとフォーラムで発表するなど顕彰と学習の機会をつくってきました。

校 豊かな心と知恵と努力で困難を克服する瑞賢の人となりや業績は、四年生以上対象の学校副読本として改訂・発行するものです。今回発行する『商人をこえた日本の偉人(河村瑞賢』は平成六年に登 河村瑞賢』は平成六年に発行された副読本を小

ましく成長する子ども達の将来に役立てばと願っています。く、むしろこれからの人々に必要な考え方として輝きを増しています。 いまも古びれることな

筆者である森本良松氏、 皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。 本書の刊行にあたっては ただきました。 した。多くの方の協力のもと、 '。同じく初版執筆者である故小山清見氏のご子息にも発行浅井正道氏には改訂版発行にご快諾いただくとともに、校 には改訂版発行にご快諾いただくとともに、校正関係各位の方々に協力をいただきました。とりわ 本書が発行できたことに感謝申し上げるととも . 対 し 近につい け初版 7

平成三十年二月四日

 \bigcirc

河 村 目 瑞 賢 発行にあたって

 \bigcirc \bigcirc 河 河村瑞賢 村瑞賢略年譜 南伊勢の東宮に生まれる

2 \ 3

 \bigcirc \bigcirc) 瑞賢、)瑞賢、 老人と出会い再び江戸へ 十三才で江戸へ旅立 つ

4 6

 $\widehat{6}$

10

○木曽の材木を買いしめる ○瑞賢、 商人としての道へ

> 10 14

 \bigcirc)瑞賢、 故郷へ里帰り ○江戸復興を機に大商人としての基盤をかためる

○瑞賢、

米の航路をひらく

31 (35

35

(

46

47

(

58

23 5 31

19

22

14

(

18

59 (

61

越後の銀山 開発に尽くす ○土木家として敏腕をふるった瑞賢

62 67

69 68

ものである。

70 5 71

 \bigcirc

考

文

献

 \bigcirc

瑞賢の家系

 \bigcirc

改訂版追記

 \bigcirc

追

記

 \bigcirc

晩年の瑞賢

 \bigcirc

)瑞賢、

河村瑞賢翁の像

表 紙 写

真

建 立 平成二年六月吉日

場 所 山腹の瑞賢公園内約四百メートル、東宮バス停より国道を西

像制作 彫刻家 高 橋 剛 氏

苦難をのり越え次第に力を発揮していく。 瑞賢の自信に満ちた、 工事の完成を期して、 工事にも多大の功績を残した。 西廻りの航路を開発し、 そうしてやがて、江戸幕府の要請で東廻り この像は元禄十二年、 十三才で単身江戸に出た瑞賢は、 力強い姿を表現した また、 現場で指揮をとる 大阪における治水 各地の治水

河村瑞賢略年譜

| - | 正二 |
|---------|--|
| ーナモー | - |
| - 7 - 1 | |
| ー | <u> </u> |
| 一六六四 | 寛文四 |
| 一六五七 | 明暦二 |
| 一六五〇 | 慶安三 |
| 一六四三 | 10 |
| 一六三七 | 一四 |
| 一六三〇 | 寛永七 |
| | |
| 一六一八 | 元和 四 |
| 西曆 | 年次 |
| | 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一 |

| 六月十六日、八十二才で死す。三月江戸へ帰る。嗣子通顕を伴い将軍に謁見する。 | ハニ | 一六九九 | | |
|---|----|------|----|----|
| 治水工事完成のため大阪へ行く。 旗本武士になる。名を平太夫義通と改める。 | 八一 | 一六九八 | | |
| 将軍綱吉に謁見する。 | 八〇 | 一六九七 | 0 | |
| 鉱山の開発をやめる。 | 七五 | 一六九二 | 五 | |
| 幕命で上田銀山、会津の白峯銀山を調査経営する。 | 七二 | 一六八九 | | 元禄 |
| 治水工事を終え、五月江戸に帰る。 | 七〇 | ー六ハ七 | 四 | |
| 工事を再開する。 | 六八 | 一六八五 | _ | |
| 安治川の疎通工事に取り組むが、一たん中止する。 | 六七 | 一六八四 | 元 | 貞享 |
| 畿内の治水工事に着手する。 | 六六 | 一六ハミ | 11 | |
| 明暦三年以後続いた高田藩の上田銀山が越後騒動で中止になる。 | 六四 | 一六ハー | 元 | 天和 |
| 長子 政朝 死す。 | 六二 | 一六七九 | ナ | |
| 高田藩の中江用水を完成させる。 | 六一 | ー六七八 | 六 | |
| 二女死す。 | 六〇 | ー六七七 | 五 | 延宝 |

河村瑞賢、南伊勢の東宮に生まれる



父(おじいさんの加わった後、 村の姓はこの秀高が、神奈川県の河村という所に祖先は藤原秀郷十世の孫にあたる秀高である。 朝に従って今の岩手県、平泉の藤原泰衡との戦 んでいたところからである。秀高の子秀清は、 るが、 小さい時の名前を七兵衛と言った。 二月十五日、 瑞賢は瑞軒、 おどうさん)に当たるのが政房である。 今から四○○年ほど前の元和四年(一六一八) 伊勢に住むことになった。 三重県度会郡南伊勢町東宮に生まれた。 瑞見、 随見などと書かれることもあ 瑞賢の曽祖との戦いに う所に住 源報 河か

加 して手柄をたてたが、 氏郷の死んだ後は東宮に帰る。 政房の孫である政次は瑞賢の父である

が、父の時代ではまったくふつうの農民になっていた。

だ碑も建てられた。そうして、今も訪れる人々の足をしばしとどめてい 木本幸吉氏 瑞賢の生まれた屋敷跡は、 (鳥羽市出身、真珠の) によって顕彰祭 東宮のバス停のすぐ近くにある。 (対績や善行を讃) が挙げられ、 大正七年(一九一八) る。 瑞賢のことをきざん 真珠王御

たわ が、 ようなことが、今も村人に語り伝えられている。 幼年時代から少年時代にかけての瑞賢の性格や行動について、くわしく知ることはできないまた。 家柄はよかったが一農家の長男として、 it では ない。 しかし、 偉大な働きをした瑞賢のことである、 決してめぐまれた環境につつまれて成長してい 彼 の少年時代の話として次の つ

主人がおだてても、 東宮地区のほぼ中央を南北に東宮川が流れている。 橋を荷馬車 しかっ (荷物を運ぶ) てもどうにもならない がわたろうとしたが馬が言うことを聞いてくれ この川に仮橋がかかっていた。 ある日

やらさっばりわからないで不思議がっていると、 といった名案がうかばない。みんなが困りはてているところへやって来たのが瑞賢である。 ばらく考えてい のようすに村人が大勢集まり、なんとかよい方法はないものかと頭をひねったが、これのようすに村人が大勢集まり、なんとかよい方法はないものかと頭をひねったが、これ た瑞賢。 何を考えつ رًا たのか「ハタ」と手を打った。 瑞賢は馬の鼻先に竹ざおにつるした人参を 村人達 はなんのこと

つけ、「ハイシ。ハイシ。」と後から追いたてた。

もうこれは前へ進むしかないというわけである。こうして、荷馬車はかるがると仮橋をわ 馬にとって人参は好物中の好物。目の前に大好きな人参を見せつけられてはかなわない。

たってしまった。

げな顔。その光景を想像するだけでもほほえましい。 瑞賢のこの理にかなった発想は見事に成功し、大勢の喜びと拍手に包まれた少年のほこらし

このことは、 たちまちにして四方へと伝わり、 少年瑞賢の人気はいやがうえにも高まって

、った。

瑞賢、十三才で江戸へ旅立つ

子どものころは、友達とふる里の野山や海を相手に、遊びたわむれた瑞賢ではあるが、

才の時に大きな転機(ガラきっかけ)が訪れたのである。

旅立つようになったのかその理由がはっきりしない。

彼は 『河村家の長男として、家を継ぐのは当然とされていただけに、どうして、江戸(ホタ)へ

大勢の村人達が集まり、江戸や各地のようすを聞き入ったにちがいな 征夷大将軍)や、役人に会うという時代である。江戸のようすは商人達によって、直接それぞ心となった人。)や、役人に会うという時代である。江戸のようすは商人達によって、直接それぞ れの地方へと伝えられた。故郷から江戸へ出ていった商人や働きに行った人達が帰ってくると、 かしている瑞賢の姿もあったことだろう。 いへんにぎわい、町民の活躍する世の中であった。外国の使いもやって来て幕府の将軍 このころは江戸幕府(た幕府(武士による政治を行う役所))の力もほぼ全国にいきわたり、江戸はたいのころは江戸幕府(一六〇三年に徳川家康が江戸に開い)の力もほぼ全国にいきわたり、江戸はた () そんな中に、 目を輝や (おかし、

「江戸ってすごいんやなあ。」

「自分も江戸へ出なければ。」「江戸で夢を実現したいなあ。」 それどころか、「思いきって異国(外国)へ。」

などという夢をいだいたかも知れない。

などと思ったとしても決して不思議ではない。

瑞賢ぐらいの年ごろになると遠くへ働きに出したのである。 である。村の多くの家では「口べらし」といって、子ども達をよその家へ手伝いにやったり、 はなかった。今とはちがって、たくさんの家族が生活をともにするということは大変なこと しかし、河村家は由緒(ケット゚ル゚)をもつ農家であるといっても、めぐまれた農家というわけで

に、 友人にたのんで瑞賢を江戸へ送ることにした。「この子なら、きっとやってくれるだろう。」と 限られた田畑では、どれだけ働いても生活は苦しいのがふつうであった。先にも言ったよう 江 戸と の往来も少しはあったから、父は家を下の子どもに継がせることにした。そうして

瑞賢の才智(ҕのは)を見込んだうえでのことにちがいない。

つけて考える時期であるだけに、悩みに悩んだことだろう。 少年瑞賢にとっては江戸のこと、世の中のこと、家のこと、そして、 自分のことなど何かに

を祈った。今とはちがい、江戸への旅は遠く、そして、大変きびしいものがあったのである。 そうして、出発が近くなると、瑞賢は村の神社や寺に江戸行きを報告し、今後の無事と成功



むかしはこのような時になると「水杯」と ともに悲しい気持ちをふるいたたせてのこ とがむずかしいとき、酒の代わりに水を杯 水杯というのは、旅に出てかえってくるこ いうのを家族と交わすことになっていた。 とだった。 で飲み交わすことである。去る者、送る者

と少年瑞賢の覚悟はかたく、一歩一歩ふみ うなことはしたくない。」「なんとして めおめと郷里(ジム)へもどって来るよ 「江戸へと決めた限り、 がんばらねばならない。」 みじめな姿でお

しめるわらじにも力が入っていくのであった。

て働くという力と根気のいる仕事であった。しかし、これによって、どうにか男一人の生活が でもない。それで、「車力」という仕事についた。当時江戸では町の水路づくりが行われて できるようになった。そして、自分もどうにか江戸でやれるという自信もついてきた。 地面をほって造る水路のつみ石を車にのせて運ぶ仕事であった。 江戸に出た瑞賢ではあるがまだ少年のことであり、これといった技術を身につけているわけ それこそ文字通り車力に

み、まずしい者はどうがんばってみても、まずしさからはぬけ出せないというきびしい現実で か。」、「自分はこれでよいのだろうか。」と考えるようになった。そうして、その答えは あった。 つでも「ノー。」と出てくるのであった。町で見たり聞いたりしたものは、富める者は常に富 のである。 しかし、このような生活がしばらくつづいた後、瑞賢は自分をふり返るようになってきた 肉体を使うきつい仕事はいっこうにかまわないが、「こんな仕事で一生を終えるの

も感じやすい時期である。瑞賢の頭には、次から次へと人生に対するいろいろな疑問がわいて のできない天命 人間の一生というものは運命として、どうにもならないものだろうか。 当然のことと言わなければならない。 (もならない運命)でありどうしようもないものだろうか。ちょっとしたことで(人のカではどうに)でありどうしようもないものだろうか。ちょっとしたことで それは、 変えること

考えながら働き、働きながら考える日がしばらく続いた。こんな生活ができたのも、

られたものではなく、自分の力で切り拓いていくものだ。」という結論にたどりついた。そし けが天からあたえられた力にちがいない。そうして、なやみぬいた末に、「人生や運命は決め て、ついにはこれが瑞賢の信念(いと信じてうたがわない心)になっていったのである。

よ。」と、てんで相手にしないのである。 ではないわ。」「どんなにさわいだって、もがいたって自分の思うようにならないのがお 瑞賢が自分の考えを車力仲間に話すと、「とんでもない。そんなことわれわれにできること

だ中から一文、一文(の単位で、いちばん小さいお金) らめこそがこわいのではないかと考えた瑞賢は、 車力仲間は自分というものをあきらめている。 というわずかなお金をためていった。 仲間はどうであれ自分はと、一日一 明日への希望も目標も失っている。このあき 日か せい

瑞賢、老人と出会い再び江戸へ

ぎわい、活気に満ち満ちている。そんな光景を見るにつけ、 てくる。世にいう参勤交代(国と江戸とを一年おきに行き来させるしくみ)である。江戸の町は大勢の人でに のように思われて、 やがて寛永十二年(一六三五)各地の大名 悲しく、また、 はらだたしかった。このままでは、自分は一生下積みの生 (をもち、将軍に直接会うことができた武士)(江戸時代に、一万石以上の米がとれる土地) 瑞賢は自分一人だけがみじ が江戸に集まっ 8 な男

活をしなくてはならないだろうと。

あった。しかし、現実はそんなにあまくはなかった。車力としての自分になんのチャンスも、 考えてきたことを実行にうつしたい。 よいことも天はあたえてくれなかった。 とを元服といっていた。瑞賢も一人前の男の人になったのである。元服を機会にして、今まで 寛永十四年(一六三七)二十才になった瑞賢は、名を十右衛門と改めた。このころはこのこ 大きくはばたいてみたいということを夢みてのことで

を車力の親方や仲間達に話した。けれども、 す以外にない。 それどころか、かえって考えのおろかさを指されたのであった。 名前だけ改めたって、いくら考えたってどうにもなるものではない。とにかく、行動をおこ 自分はどこまでできるか、力を試すことだ。そこで、 誰一人として受け入れてくれる人はいなかった。 瑞賢は自分の思いや考え

「ばかな。江戸はこれからじゃ。今ごろ江戸をはなれるなんて、宝の山をみすててしまうこ

とじゃねえか。」

言われてみればその通りだが、いったん心に決めたことを変えようとは思わなかった。 瑞賢は早速、

(一つ。二枚で一両)を持って、(江戸時代の金貨の)を持って、 を持って、東海道(キー喬ヒー京೪ルを培スン鍼サムドスのチョ道)を西へ、上方(阪地方)目指して家財道具(着物などの財産)一切を売りはらい、今までにためたわずかな金二分がさいとうぐ (本橋と京都を結ぶ海岸沿いの街道)を西へ、上方(阪地方)目指して(江戸時代の五街道の一つ。江戸の日)を西へ、かみがた(京都や大)目指して

旅をはじめ

川は 田原まできたとき、 宿で一人の老人と相部屋になった。このことが、 自分の今後を大きく

き入っていた老人。やがてゆっくりと話し出した。 まじって自分の考えていることを話した。若い彼の身上話(きてきたありさまの話)をじっと聞 らないので、はじめのうちはだまっておとなしくしているが、次第に慣れてきて自分のこと 他人のこと、各地のことなど好きなように話し合って時間をすごす。 |部屋というのは、見知らぬ人達が同じ一つの部屋にとまることをいう。相手がよくわかで、* 瑞賢もこれらの人達に

限るんや。江戸は男が志を立てる所なんや。車力だけが仕事とちがうんや。悪いことは言わ 「何言ってるんや。あんた。働くのなら日本六十余州 (のこと)の富と人とを集めた江 戸に

と、まるで自分の子どもか孫でもさとすようであった。老人は続けて言った。

ん。じっくり考えて、目を他のところへ転じなされ。」

どってひと励みされるがよい。」 「あんたの人相(き、顔立ち)には立身出世(れよい地位につく)のとてもよい相がある。

そうして、心はまたしても大きく動いていく。 話が進むにつれて老人の目は輝き、瑞賢は頭をたれてただじっと聞き入るだけであった。

次の日の朝早く、今来た道を再び江戸に向かって行くのであった。夏の太陽はえんりょなく 「そうだ。どうなるかわからないが、ここは老人の言うことに従ってみよう。」と、



て、そんなことは少しも苦にならない。照りつけ、体中に汗がにじむ苦しい旅なのだが彼にとっ

るいた。 るいた。 は、仏教で旧暦の七月十五日に、先祖の霊をまつる行事。墓参りをした)の後 ないえの精霊だなに供えた茄子やウリ、その他の野菜がまいえの精霊だなに供えた茄子やウリ、その他の野菜がまい、のた。海や川のようすは江戸を出た時とはちがい、 定で、 (仏教で旧暦の七月十五日に、先祖の霊をまつる行事。墓参りをした)の後 に対する 八月十五日に行うところも多い)の後 に対する (人教で旧暦の七月十五日に、先祖の霊をまつる行事。墓参りをした)の後 この時はちょうど七月の孟蘭

あたりをながめている瑞賢であったが、やがて、堤防に腰をおろし、つかれた体を休めながら、じ「もう、盆も終わったか。」

「こんなにたくさんの野菜。このままみすてることは

「そうだ。これを何とかしては。」

ない。漬物にして売ろう。」

これを車力仲間や石積みの人夫(をする人)達に売りさばいた。 早速まわりの人達にわずかな金をあたえ、 茄子やウリを集めさせて漬物にした。そうして、 漬物は思わぬ人気をよんで、

瑞賢の毎日は大変忙しくなっていった。そして、商人としてのきっかけをつくった。

得て、 うになった。 こうして売っている間に評判になり、土木工事の指図をしている役人とも知り合い、 瑞賢は人夫の頭になった。そして、後には責任を持って仕事を引き受ける請負もするよ 信頼を

うか。 のとして得たもので、 である。瑞賢の土木に対するすぐれた考えや、 こんなことで、いくらかの資産をつくり家を建て、次第に商人としての道を進んでいったの その智恵才覚 (頭の働き) 商いの要領(チーくする方法)はこのころに自分のも がすぐれていく土台となっているのではなかろ

瑞賢、商人としての道へ

ろう。 江戸に出た瑞賢が、 人の娘であった。親の吉兵衛は車力の頭をしていた。だから、はだか一貫(も持っていないこと) 瑞賢は寛永二十年(一六四三) ごろに結婚した。二十六才のことである。妻は脇吉兵衛とい 親の吉兵衛の後を受けて、 車力の人夫として働くうちに親しくなり、娘と結婚することになったのだ 瑞賢も車力頭になったということも考えられる。 () ずれにし

ばらしい頭 ても、 瑞賢は吉兵衛の下で働いているわけであり、彼の働きぶりや人柄と、 の持ち主であることを認めてのことであろう。 他の人にはない す

吉兵衛だけでなく、 仲間の間でも瑞賢の評判は、 いやがうえにも高まっていったという。

られ 運送は 送することを引き受ける下請けの親方だったのである。 あ 時の江戸の車は つながりがあったと思われる。そして、車力頭とは車曳きの人夫をたくさんかかえて、 () つ このころの瑞賢は、 た初 船から荷揚げる河岸と商店、河岸と普請現場とを結ぶ商業なり土建業 大きな荷物は、この大八車で運ばれたのである。運ぶ荷物のおもなものは、米と材木で めのころには、 土 地 の造成は 「大八車」というもので、人の曳くこの二輪車が町中での運送の中心をなして「大八車」というもので、人の曳くこの二輪車が町中での運送の中心をなして (くすること、造り上げること)と建築とを合わせた「普請」が大が(土地などに手を加えて使いやす)と建築とを合わせた「普請」が大が 江戸深川の霊岸島に住み、生活もようやく安定していたようである。 材木とともに石材や土を運ぶことも多かったのである。だから、 (発(一屋)) なりと、 か、 りに 車力 当

相手の 方向 ってよいであろう。 瑞賢はどんなときでも「自分に一番あっ 「やる気」をおこさせることが大切であると考えた。 から自分というものを見つめていた。このことは生きていくための賢明さ(カケたずけるカ)から自分というものを見つめていた。このことは生きていくための賢明さ(物事をうまく) 考えや思いをすばや 彼は仕事を進めていく上で、役人や多くの人夫達とかけ合うが、 く読みとることにすぐれてい た場所」というものを考えていた。広くい そのためには、 た。 そし て、 何よりもまず現場 上に立つ者のすぐれた ろい $\widetilde{\mathcal{O}}$ 人達 ろな つも 2

 \bigcirc

たったのである。そのために、仕事は順調にすすんでいくのであった。 観察の目と、 りや、 仕事の能率がうまくいかない。瑞賢は考えに考えを重ね、十分な計画のもとに事にあ すばやい決断 (すばやく) が必要である。この二つが十分でないと現場でのまとま

ことに や技術を生かして、このままいくのがよいのだろうか。それとも、材木商として方向を変えて もとより両者はたが いくかということである。自分の一生の仕事としていろいろ考えた末に瑞賢は後者の方を選ぶ 、このような瑞賢がどうして土木業から材木商へと転身 (セーサを)してい いに関係が深いものである。今まで一生けんめいにやってきた土木の ったのだろうか。 知は記さ

を受けなければならない。自分にどれだけ自信があっても、役人とたちうちすることはできな のは決まっているではないか。このことがなんだか自分というものをダメにして、役人にだ って従うことにならないかと考えたのであろう。 このまま土木工事の現場にいれば、どうしても役人の下にあって指図 (人にあれこれと言い

- 自分はもっと自由になって、 自分の思うようにやってみたい。」

「たとえ、失敗があっても力いっぱいやってみたい。」

瑞賢の人並すぐれた智恵や力がそうさせずにはおれなかったにちがいない。多くの人夫達に惜 L まれ 彼は人夫頭をやめて新たな道へと進むことになるのである。

商売は材木の売買であったが時には土木工事の請け負いもしたという。 材木を見る目は今ま

の腰の低さもあって、 ないで、いざという時には、 人夫を集めて現場に行かせるというのである。 での仕事でわかっていたから、 仕事もうまく進んでい 思いきった事をする性格であった。そんなところへ、商人として 工事の注文があれば材木を買いに走り、 つ た。 瑞賢は生まれつき小さい事にはあまりこだわら できるだけ安く買い、

る場所)に向けて「天下の台所」と呼ばれた大阪を中心として、使ってい)に向けて「天下の台所」と呼ばれた大阪を中心として、 江戸の商人の中でも特に大きな力をもった人達があったと言われ あつかう大きな商人もあらわれて活躍した。この商人達の中には、後に「伊勢商人」と呼ばれ 流れこんだのであった。そうして、世の中は土地と武力と家柄 町民五十万人、あわせて百万人をこえる人口であった。この巨大(きょ)な消費地 すべてに「金がものを言う。」時代へと大きく変わっていった。したがって、これらの物資を (キニュキの国゚)の商工業者をさかんに江戸へさそい入れていた。当時でも江戸は武士五十万人、(タシィの国゙ホ)の商工業者をさかんに江戸へさそい入れていた。当時でも江戸は武士五十万人、 ところで、 江戸は徳川家康 (対代将軍の) の時代から、 「城下町江戸」づくりのために、 (むかしから伝わっている、 ている。 大量の生活物資 に代わって (要な物) が (ろいろな物を 諸は国

大小の絶え間なくおこる火災で、江戸では五年ないし七年のうちに、ほとんどの町中の家いえ かい りなしに大きな土木工事が続いていた。 方、 ってしまうとい 江戸 Í 江 戸 、城をはじめとして、 われるほどであっ た。 それに、「江戸の花」とまでいわれた火事が 諸国の大名家敷や寺社の造営 (まて) などで、 あ U.

瑞賢も江戸にいて、 このような町のようすを見ていたわけであり、 彼ほどの人間だから何か

うにもなるものではない。「果報はねて待て。 (ト幸運を手にするには、あせらず静か)」というではないか。 考えるところがあったのではないか、と想像しても決しておかしくはない。彼は仕事をしてい そして、その機会がやって来たら、 く上で、「機会」というものをとても大事に考えていた。人間いくらあせっても急いでも、ど すばやく動き出すことが大切だというのである。

注意深く見守ることが必要であると考えた。 にゆっくりやって来ることもあれば、反対に突然やって来る場合もある。だから、この両方を しかし、この機会というのはいつ、どこからやって来るのかわからない。 世間 の動きととも

がの瑞賢も神ならぬ身、今はそこまで見通すことができなかったのである。

この機会というものが自分の上に、それこそ突然やって来ることになったのであるが、

木曽の材木を買いしめる

○ ブロ ー ○先見性と果断※せんけんせい ※か だん カー 的才覚の発揮 な実 行 力

※先見性(先を見とおすこと) 果断(思い切ってするさま)

かりでなく、江戸城の天守閣 火の手がやっと下火になったのは二十日の朝で、猛りくるった火は江戸の町をなめつくしたば 明暦三年(一六五七)、正月十八 (る一番高い建物) にも飛び火した。 日の昼すぎ江戸の町に火の手が ブローカー(売り買いの仲介をする人) あがり、 翌日も燃えさかった。

死者は十万八千人という膨大な数となった。この時また江戸の材木商が持っていた材木も、

IJ は非常にむずかしいことだった。 ころに えりみず、家中にあるだけの金銀をふところにし、昼も夜もなく休まずに、長野県の木曽に至 多く焼けてしまった。 炎々と燃えさかる火で霊岸島にある自分の家も危険になったが、瑞賢は自分の家のことはれれる。 木曽全山の材木を買いとろうとした。木曽の材木の買い付けが目的であった。瑞賢がふと した金銀はあわせて十両 (ナヤヤ)ばかりで、その資金で木曽中の材木を買いしめること(メトサヤ)ばかりで、その資金で木曽中の材木を買いしめること

ようすが次のような逸話 らっている時、 無邪気に遊ぶ子どもにおもちゃをあたえ、それを突破口にしていこうとひらめいた。その時の 付けをしたいと思った。木曽山中の旅館に宿をとり、お手伝いの女の人に足をすすい 瑞賢は、 十両をどのように使えば効率的な買い付けができるかと考えた。また一刻も早く買 門前で宿の子どもらしき子が、 (世の中の人々にあまり知) として伝えられている。 無邪気に遊んでいるのが目に入った。その時

に驚き、喜んで家の中へかけこんだ。 紙 にあたえたのである。おもちゃをもらった子どもは、 (のこよりを通しておもちゃを作った。それをちゃらちゃら振りながら部屋を出て、子ども 瑞賢は宿の部屋に案内されると、ふところより三枚の小判を取り出し、小刀で穴をあけ、 小判とは知らず振るといい音がするの

たえたこの人は、 して聞かせた。 旅館の主人は、せがれの持っている高価なおもちゃを見てびっくりし、小判を子どもにあ 主人がその気になって、 きっと江戸の大金持ちにちがいないと信じて、材木買い付けの相談に応じ 材木問屋へ案内してくれ、 宿でのできごとも、 問屋の亭主に話

後から参るはず、まずは材木のことを商談したい。」 「私は江戸の者で、急に沢山の材木が入用なのでおじゃました。手代 (ている者) や供の者は

と申し入れた。

積み(屋外につむこと)してある材木を見せてくれた。それをただちに見積り値(計算をすることす。 (荷物・材料などを)してある材木を見せてくれた。それをただちに見積り値(あらかじめ大体のよどの大金持ちにちがいないと思い、下にも置かないもてなし(こまかいところまで行き届)で、よほどの大金持ちにちがいないと思い、下にも置かないもてなし(こまかいところまで行き届)で、 を決め、買うことを約束し、極印(止のためにおした文字) 亭主は瑞賢の堂々とした身なりとふるまいを見て、これは宿の主人の言った通り、江戸でも を打って他人に売ることを禁じた。 (計算をすること)

そして代金は程なく手代の者が後から持参すると言いおいて、ゆうゆうと雑談して日を送っ それから、この問屋で売買できる材木は、ことごとく買いしめてしまったのである。

たのである。

の逸話はどこまで信じるべきかはわからないが、買うことを約束するまでは、瑞賢もひたいに 十両という資本 (要なお金・土地・建物) で木曽の材木を、ことごとく買い付けたといわれる。こ(ある仕事をするのに必) で木曽の材木を、ことごとく買い付けたといわれる。こ

汗をにじませたことだろう。

ť 多くの利益をもたらせたことになった。 瑞賢が江戸を出る時、自分の家が猛火に迫られているのをかえりみず、 た。先のことを見ぬき、 思いきったことを大たん(ジードヒとをするようす)に実行した彼に、 ただちに木曽 へおも

ばならないことになった。材木のねだんは急激にあがったが品物が足りなかった。そこで材木 高くなった。ところが材木屋がもっていた売物が焼けてしまったので、 江戸では町を復興(ビまた、さかんにすること)するために、材木の需要にすでは町を淡まり(元のようにさかんになるこ)するために、材木の需要 (い、買いたいと求めること)(必要なものを手に入れた) 急に他から取りよせね

金で、この時瑞賢は数千両の利益を得たという。 が材木を直接手にせずしてもうけ、 ざるを得なかったことから、 しかたなく瑞賢に会って材木のゆずりうけを交渉した。材木屋は瑞賢の言う値段で材木を買わ 屋が木曽へやってきて問屋で買おうとしたが、材木は瑞賢の極印付ばかりで、ほかに一本とし て売物がなかった。せっかく木曽まで来たのであるから、なんにもなしでは江戸にもどれない。 瑞賢はかなりの利益を得て、どんどん売買したのであ その金で問屋への支払いをすませたのである。 った。 わずかな資 自分

いる。野史とは飯田忠彦という人が書いた本で、また翁草は神沢貞幹という人が、見たり※この商いの話は野史という本にしるされて有名である。また翁草という本にもしるされて 聞 いたりしたことを書いた本……その巻八に瑞賢一代の逸話がかかれている。

- 22 -

江戸復興を機に大商人としての

一府の役人に近づいて

, っ

た

0

○町人に信望と尊敬を博した

0 場にうまく適応したすばやい気転をきかせた仕事をした

が、新井白石が書いている「折りたく柴の記」の中に日本一の分限者 ずることが多く、 業者よりも () ていたところを見れば、とにかく金持ちであったことはうたがいのないところである。 この時瑞賢は四十才の働きざかりで、 ※新井白石とは、この時代の儒学者、 瑞賢が木曽でもうけた金を、ふところにして江戸に帰った時は、 直ちに建築請負業をはじめた。江戸に帰っても商いのチャンスを見のがさなかった。 目立 つ 評判はますます高まった。 た働きと財力は、いたる所で語りぐさとなり、 数百人の人夫を使って、 政治家で、将軍徳川家宜の学問の先生、せいじか その財力はどれくらいであ 諸大名の家の 霊岸島の自宅はすでに焼ればがんじま 日夜仕事に明け暮れた。 (金持ち・) ったかは明らかで 復興も瑞賢に命 河村瑞賢と書 他の けて な

関係をもった。

瑞賢とも深い

23 -

した所) わり、 えて、町の形を整えること)いる土地などの仕切りをか) ことは ることが必要であった。このことは、 仕事を直接請負うには、どうしても幕府の御用商人 江 戸の復興は家を新築するばかりだけでなく、 の工事、 おもだった役人に取り入った。そのことが翁草にしるされている。 商人として成功する秘訣であると常に論じた。木曽で得た富をたくみに用いて立ちま 橋をかける工事、道路の工事、 なども、 幕府の命によって行った。そのために埋め立て工事、 いずれの時代においても同じことが言える。 |||の工事などいくらもあった。しかし、 焼けて何もなくなった町の区画整理 (りをゆるされた商人)としての地位を確保す(江戸時代に幕府に出入)としての地位を確保す 掘り割り 地位をうる 幕府 (道路や家 (地面を

を寄進 は美濃守の領地神奈川県小田原の城下、長高寺といすが下で幕府の政治を取り仕切った)稲葉美濃守正則方へは、(江戸幕府におかれた役職名。将軍の)、『なばみののかみまさのり る寺であることに気付き、 瑞賢はおもだったほとんどの役人に、 (寺や神社などにものや) したのである。 その寺へ見事な銅で作ったはすの形をした、 長高寺というお寺が美濃守にとっては、 取り入れられたが、 取り入ってもらえなかった。 幕府でもっとも重職にある老中 手を洗う鉢のそろえ 先祖をまつ そこで瑞賢

をゆるされるようになった。 美濃守はその鉢を見て、 瑞賢というやつ、ふつうの町人ではないと知って、ようやく出入

としるされている。

年、 を造ることになり、 れると、 そ の後、 万治元年(一六五八) 幕府は町であったところに火よけ 瑞賢が幕府の そこの町の 御ご と二度に 用商 人達 人の地位を得て、 わたって、 は 瑞賢が住 の運流が 大きな火事があった。 幕府の工事を多くするように で (ったりするために、人が造った川)、船が行き来したり田畑に水を送) () る霊岸島 へうつされ 火事で と 土^ど なっ 0 ŧ 手で た。 蔵るの 町 (堤間の) が 明的 焼 暦三 か

※

、瑞賢

 \bigcirc

家には、

南新堀

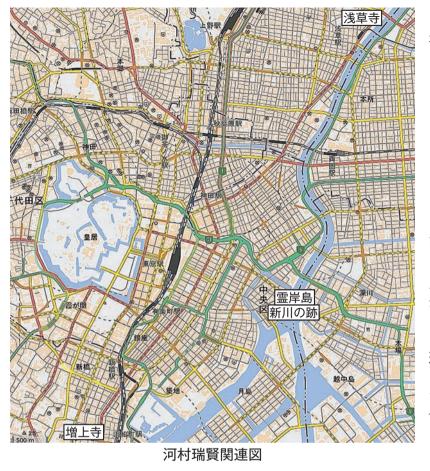
町麦

 \bigcirc

南

かい

わ



瓦がきの中 代に町人に 河が造で 伝えられてい Z 区 る か 11 屋や 1+ の区史に 互敷がある に 7 約五 新 蔵 他 家 Ϊį 1 四 ij が、 棟ね 七不思議 はゆるされ 11 しるされ る。 な X が 瑞賢屋 主屋は瓦ぶ あ n 座さ つ 1 てい 敷き \bigcirc たと東京都 ルぐら 7 敷 る。 つ 10 () 日 きで土とれ Z, なか 建 本 橋 つ 中 言 \mathcal{O}]]]時 央 \bigcirc

かるのである。として、重宝がられていたことがわとして、重宝がられていたことがわこの頃より瑞賢が幕府の御用商人

さらに、区史の中には、 このような話もある。

こまったこまった、何とかならんか、 商家がうつされたので、 船で酒、 しょう油、日用雑貨を運んでいたのができなくなって といってもどうにもできない。



新川大神

なった。 日 河岸もしっかりと頑丈につくられた。 進められ、 く工事の許可がおり、 万治二年 市町は北新川となり、 一の橋、 六五九)、 二の橋、 瑞賢の指導のもとに 南の新銀町が 幕府から運河 三の橋もかけられ、 南新 北 を切 \bigcirc 工 川と 新四 事が り拓

ŧ を建てれば、酒だるやしょう油だるの保存は、船をとおすこともできようし、河岸に蔵 ŧ いしてやろうよ……」 いうことになる。すると瑞賢は そこで瑞賢さまの知恵を、 できようでないか、 つごうがよかろう。 日本橋 つ私が幕府に お かり へ積み出 「運河を掘れ お願 すに

こうして新川の酒問屋街 に酒蔵がならんだのは万治三年のことであった。 それから三百年に

わたって新川筋 は 江戸にお ける酒 の 一 大市場となって栄えた。

]]] を埋めたててしまっ 昭和二十年三月九日 たので、 の戦災によって東京の下町一帯が焼けてしまった。 昔のようすはまっ たく残 って () ない。 それで、 東京都は

がらや功績を多くの人々に報告し、 都 内 の同志は相談 して、 新川跡を へ、新川大神宮を再建した。 また瑞賢に対する感謝の気持ちをあらわすために、 跡保存会がつくられ「新川之世をほぞれた また、これを記念して瑞賢のこと 新川史



もうなずける。

に期待され、 の碑がたてられたの 大火後における瑞賢の仕事の すがよくわか 中 央区の区史によっ 信頼されていたこと る。また町内の人々 であ て、 る。 明 暦 の よう 跡を

だ。」と、人々に深い印象をあた えたのであった。 あの男は頼 みが あ る男

また、 瑞賢は人々の心を、 とらえることがたくみであった。

けば、 大名が金蔵 なる。一人の人間の利益のみを、どうこういうことは、せまい」と言ったそうである。 をかけめぐることになり、町の景気 ある人が、 2人が金もうけをすると、自分がもうけたように喜んで、その人を招いて酒盛りをした。 人夫にい にしまってある金銀は、 他人のことであるのに、どうして酒盛りをするのかたずねたら、瑞賢は たるまで多くの人が、 土の中に埋もれているのと同じだ。 (゚゚゚てくる状態)がひき立って、自分達も利益をうることに(商売でお金が入)がひき立って、自分達も利益をうることに その金にあやかることができる。そうなれば金銀が その金を町中にば 幕府や 天下

とげた話しが多く残されている。 瑞賢にはまた、 その場にうまく合ったすばやい対応で、むずかしい仕事をやすやすと、 もっとも知られているのは芝の増上寺の鐘の逸話である。 成し

半分にも当たらぬ安値であ 出すと、どの業者の入札も、 ある。その鐘を上げる工事をすることになり、請負入札 V び 増 わ 上寺の n な 鐘は四代将軍徳川家綱とくがおいえっな 合金の鐘 壁を造 つ ったから、 おどろくほどの高値であった。 たが の時までに、 その重みでつってある金具が折れて、 ただちに落札した。 七回もひびわ (う金額を書いて取り引きの相手に出すこと)(工事などで、いくらなら仕事を受けますとい ただ一人瑞賢の入札は、 れ困っていた。 地上へ落ちたので そこでなんとか

この時、 入札に来ていた業者は大笑いして、「見ろ、 瑞賢のやつ必ず大損をするにちがいな



させ、その上へ鐘をころばせた。また俵が運ばれる

とさらに上につみ鐘をころばして上へ上へと上げた。

ちょうどよい高さになった時、

(前の形をしている)につり金を引っかけ、

われもと米屋が俵を運んでくるのを鐘のそばへ並べ

建物)の前へ持って来るようにふれさせた。

われも

(鐘を かた)

米をたくさん買うから俵のまま増上寺の鐘楼

三十人の人夫をつれてきて、

寺の門前にある米屋へ、

瑞賢は頭の中では成功させる考えがあった。二、

い。」と言った。

米屋へは、 米を一割引で売りもどすからとふれる

ちにつり終わったのである。

こんどは、つみ上げた俵を取りのけて、見る見るう

部にある龍頭

そうして、

この事を聞いて見物に来ていた人達を、あっとおどろかせたのであった。 Z, 先程の米屋達がみんな持っていった。

そのほかに浅草の観音堂のおにがわらが台風で落ちてくだけたので、 おにがわらをさしか

鐘の

上

ずれも高値であった。 かえるということなので、足場を組み立てる費用がかさむと業者達が見積り、 お にがわらのさしかえ入札をしたが、屋根が高いうえに、大きくて重いおにがわらをさし 入札の値は

ところが一人瑞賢の入札だけは、他よりぐっと安かったのでたちまち落札した。仲間

達はあまりにも安値で落札したので、どのようにして工事をするのか不思議に思った。

の入札のことが町の瓦板 (られたチラシ)にもなって、町中の話題となったのである。(江戸時代に売)にもなって、町中の話題となったのである。

いよいよ工事の日である。町の人達が朝早くから大勢で見物に来ていた。 一賢は風の方向を見て、凧をあげはじめた。おかしなことになったと見ていると、凧がほ

どよく上がり、ついに観音堂の屋根をこえた時、瑞賢はその時を見すまして、糸を急にのば 凧をくるわせたからたちまち屋根ごしに地へ落ちた。

見物人は、 なぜ凧を上げたのか、また落したのかさっぱりわからない。 なかには瓦を早く

さしかえよ……の声もする。

せた。この二筋の縄ばしごが向こうへ届くと、お堂の前後に頑丈な杭を打って、 向こう側へひっぱらせて、次々と太い糸をつなぎ、しまいには縄ばしごを二筋 瑞賢は凧が落ちるとすまして、凧の糸を屋根の上にまたがせ、そのはしに太い糸をつなぎ、 つない しっかりと

はしごに登り、長くて広い板をリレー方式で屋根へ上げると、こんどは屋根の上に横たわっ ているはしごと瓦の間に板をさして、重みをささえる足場をつくった。 しばりつけ、下の方から、板をしばりつけ段々と頑丈なはしごにあつらえていった。 とうとう屋根までとどき、屋根へ登っていけるようにしたのである。人夫達は十人ばかり

を上から引き上げ、下から押し上げて、すえつけたのであった。材木の足場を組まないで、 め讃えたのであった。 瓦をもとのようにさしかえたのであった。一日で仕事をすませるというすばやさであった。 仕事が終わった時、見物人達は瑞賢の頭のよさと、すばやい仕事ぶりにおどろき、またほ さて、はしごと足場ができると、必要な道具はぜんぶ引き上げてしまい、次におにがわら 仕事がここまで進むと、見物人も次はどうするか、やっと納得したようである。

「あの人はなんでもできる。」という印象を、町の人や幕府の役人にもあたえたのであった。

瑞賢、故郷へ里帰り

におまいりし、 十三才の時、 家族や村人に見送られて、江戸へ旅立った瑞賢であった。 旅の無事や家族の無事、また自分はりっぱな人間にきっとなりますと、 そのさい神社やお寺 、神仏の



護を祈ったのであった。

賢さんと江戸の

人達

15 親

しまれ信頼され、

尊敬

その時よりい

<

たの困難をのりこえて、

新

]]]

 \bigcirc

瑞

る人になってい

た。

前に

2

いかずき

(ほどていねいに拝む)、(ひたいを地面につける)、

前ばん

途と

(これか)

 \bigcirc

加か

神前に巨大な石の山の地でである。 忙を極めた年に亡くなった。 年大火の年、 過ぎていた。 三十三年前、 この時瑞賢四十六才、 仕事が忙しくても故郷のことは忘れなかっ 護にお礼 父政次は三十三才の時に、 神仏の前にぬかずい 瑞賢 の鳥居を寄進し 穴が木曽の材木を買い するためと、 東宮を出てより三十三 父母の供養の て前途を祈 母は明暦三 85 日夜多た た た神 た。 年 め

きざまれ、 父母の墓は宝塔形の大石で、 この時に、 左の柱には寛文三年に造 1 l か では な () がが 父母 文字は次のようにきざんである。 での 墓^{はか} りましたという記しがきざんである。 も建てられたと考えられるのである。

は右

の柱に、

中国人の学者陳元贇が作詩

した漢詩が

たの

で

、ある。

鳥居



き

要をしたりと亡くなっ た方を供養すること、 大仙寺に六百巻の大般若経がある。 と盛大でりっぱ メり柔留(ターセルトでクト幸福)を祈願がいるのでであるといるであるとしるされているが、まさなおできる。 を催したことであろう。 な追善法要 (なえ物をあげたり、 と) その毎巻に寛 法

文四甲辰暦、

る。

して

寄進

これは父母の冥福

したと思われるのである。六百巻はぜんぶ桐のたん

す入りでまことにりっぱなものである。 この観音像は瑞賢が大般若経を寄進してより十年後のものである。 に河 対政朝 (瑞賢の) によって観音像 「延宝二 (一六七四) 甲辰六月」 が寄進されて

※その他

る。

右側 氏政ま

正面 得雄玄了居士

左側 慶安三庚寅暦六月十六日

正面 左側 河村氏政次妻 梅巌妙林大姉 野暦三丁酉暦十月十二日

、母の墓

右側

上 土諸華臺中各有化 毒 根供 菩薩及 蜜多令諸 人具多少 諸眷属見 面 還 開者 供 散 養恭 佛為 必獲 西 巴歡喜歡 方佛 敬 諸 無 質 菩 神 重 讃 說 歎 大般 菩提 有 佛

大般若波羅蜜多經卷第一

大

般

え

つけるのに大変なにぎわ

いだっ

たろう。

若

経

十六成神衛護真詮人任專助孝妣其福廣致國 瑞雲山大仙禪寺伏 大 般若波羅蜜經全帙六百軸施入勢州度會郡 積祥見聞受持光明 燦爛 寛文四 展甲 曆孟春吉 願大部法典成滿淨智妙圓 且 河村氏政直奉

> 持ってきたのは四年ではなかっ 寛文四年としるされてい 鳥居には寛文三年としるされ、 居 や墓石 11 お そらく奈屋浦 るが、おそらく東宮に パまで帆船 たろうか 大般若経 12 には ょ

の荷のあ て輸送され つか たと思われるが いについ て、 特に神社や墓地 大形 で 重 石造物 にす

導を行 また伝言も見あたらな 賢が先導してその仕事をやったとすれば、 逸話が伝えられていてもお の仕事で見せた、 そ O· つ 時瑞賢が東宮に滞在して、 たかどうかははっ みんなをあっ……とい かしくな きり すえつけ () 0 0 わ ŧ せる の指し 江戸 L 瑞

術を楽しむこと(一人))からはなれて、自然や芸り 残念ながら郷土に 賢は郷土の村民にも尽くした。 に全国を漫遊 つまでも続くようにと土地や山林を買い、 は が東宮に来ると、 それらしき書物 している文人 弟 東宮の河村家に宿泊したそうである。 (小説・詩・書・絵などをか) $\dot{\bigcirc}$ がなく、 政連が (東宮の) には、 家や蔵なども建ててやったそうである。 や書画が 自分が生まれた生家であるからと などをか ~く風流人 世間的なわず

瑞

つ

て、

()

また農業が不作の時、寛文十三年までに三百五十二両の小判をとどけている。 この金は東宮

の人々 のために使われたのであった。

※当時の一両で米が七石買えた、七石というと米俵にして十七俵余りになる。 できると思う。 ラムでいえば、 俵は六十キログラムであるから、三百五十二両というお金の価値は想像、七石買えた、七石というと米俵にして十七俵余りになる。現在のキログ

瑞賢、 米の航路をひらく

○海が 運史上に残る大事業

〇東 廻き ŋ 航 路

西 廻 h 航 路

たことである。 ごになると、参勤交代の制度によって、徳川氏が江戸に幕府を開いてから、ロ 河 ...村瑞賢の事業の中でもっとも重要なものは、 そのことの重要さは、 日本全国の人が江戸へ集まってきた。三代将軍家光 日本の歴史上に大きくとりあげられている。 大名がさだめられた期間 奥り羽り (現在の東) の海道 江戸に滞在することになっ (船で人や荷物) を改革し の時

代になると、

た。江戸の人口はますます増加した。

※ 元禄時代(一六九〇年頃)には約百万人の人口だった。

の人達の主食である米の消費がますます増大したのである。 江戸は米の生産地でない

他の地方にたよっていた。

% 地方といっても大名の領地で生産する米でなく、 幕ばの (徳川氏) が地方にもっ 7 () る領 地

でとれる米のことである。

幕府の領地のことを天領ともいう。 わ あ n った。 てい る。 日本の国に広く散らばっていて、そこで生産される米はぜんぶで四百万石だとい 幕府はこの米をお金にかえて政治をしていた。 その天領は江戸を中心にして西南地方と東北地 方に

戸復興の為に幕府の経済は大変苦しくなったのである。 できた。寛文の頃になると人口の増加もさることながら、 西 南地方でとれる米は、 海の航路が早くから開けていたので、 明暦以後江戸の大火などにより、 容易に江戸へ輸送することが

東北 の米を江戸へ輸送することが必要になった。

に呼んで、意見を求めた時、 幕府では会議を開き米の輸送を確実にできる人材をさがした。 幕府の役人達の間 したのであった。 その人達から江戸で信頼されている瑞賢を推せんする声が多かっ でも瑞賢のほかに適当な人材がい その時老中稲葉美濃守も瑞賢を推挙したのであった。 ないといって、 江戸の土木家や商人達を役所 推り (仕事や地位

こうして瑞賢は、 寛文十年奥羽 折福温 ※がり、福島、一次がり、福島、一次がり、福島、 の米、 数万石を江戸へ輸送することを命じら

れたのである。

※桑折、 梁川、 福島は幕府の天領

天領で生産された米のことを御城米、 御ご

の仕事はかんたんでない事を感

瑞賢は幕府の命をうけて、

官光、 用米と呼んでい た。

ンダの船が、 ŧ ら波をのりこえやって来てい じた。でも日本へは中国やオラ よき方法を考えれば、 するという自信がわいてきたの ではないかと考えた。 奥羽の海は風波高しといえど 日本国内の事であるから、 はるか遠 必ず成功 くからあ

て、 であった。 瑞賢は仕事を進 これまでの奥羽海運 め る の実状 あ



瑞賢が開く前の米の道 (東廻り)

を調査した。すると多くの欠点がわかったのである。 その最大の欠点は海路だけでは江戸へ輸

送できなかったことである。

船も堅固でなく、 ぱってさか せつな米を海へ投げ入れたり、 ある。もうけを第一に考え、安いお金で輸送しなければならないため、 をとっていた。 もう一つの欠点は、商人に入札させて、もっとも安い値で落札した人に請け負わせたことで 千葉県の銚子まで輸送船がくると、 のぼり、 (前ページの図) 一俵でも多く積んだ。 次に小船をとおすためにほった溝に船をまわし、 また船ごと海底にしずむこともあっ 御城米が江戸へ着くのに約一年もの日時を要したのであった。 御城米を小さな川船に積みかえ、 海があれると、 乗組員達が が自分の身を心配して、 たそうである。 江戸湾へ出てくるコース 未熟な水夫をやと 利根川を人や馬で引っとれがお

瑞賢は調査によって、次のような目標をおいたのであった。

◎短期間に安全で確実に輸送すること

ようすを調査させ、 瑞賢は部 下を福島県の阿武隈川とその下流である宮城県の荒浜 絵^え 図す に 説明を加えさせて報告させて る。 へ行かせ、]]] のようす、 港の

そして幕府へ提出したのである。 瑞賢は従 来の輸送の欠点を把握 部下の報告から目標を達成させる為の意見書をまとめた。

意見書

輸送の 船は民間の商船をやとい、 船には御用船 (幕府が使) の旗をあたえてほしい。

、乗組員は丈夫で、技術のある者をやとってほしい。

信夫郡 千葉県の房総沖に の御城米 İ 達し]]] 船 で阿武隈川を下り、 それよ ij 神奈川県の三崎かながわるころ 荒浜で輸送船に積み針路を西南にとって、 か、 静 岡県東部の下田にい たり、 西

南の風を待って江戸湾へ入る。

破は飛びろとこ ま た茨城県の平潟、 をおいて、 (ヒスト)の事故があった場合は助けてほ (を運ぶ仕事をしていた人)で通知し順次江戸までれんらくする。また難船(むかし、急ぎの手紙など)で通知し順次江戸までれんらくする。また難船 船名、 那种港、 発着の日時、 千葉県の銚子、 乗組員のようす、 L () 0 小港を寄る港とし、 積荷など点検し、 そこに番所 (あらしなどにあい 次の港へ急 (設人の

一、地方の人に御用船の旗印を知らせてほしい。

幕府はことごとく意見書の内容を許可し、 天領や港に関係する大名、 代だな (地を治めていた役人)(江戸時代に幕府の土)

に命じて、 御城米輸送船 の保護にあたらせることになった。

者を選び、 とい わたして乗組員に守らせることを徹底したのである。 瑞賢は早 わ ħ る三重 家族の生活を十分に保障するように 速 四 \bigcirc 7 伊 0 勢、 港 部 愛知 下を行かせ、 \bigcirc 尾張なり 和 歌 番所をつくり点検 山 の紀伊の した。 船頭には輸送で必要な決まりごとを申 商船をやとうことになり、 の準備をした。 またも 水夫は つ とも堅固だ なれ

() 御 城 米は < 生産地 < 、調べ岩が より 阿武隈 Ĺ ょう 川を川 (水中に隠れ) 船 ī て川下しすることにした。 や難所を図にかい たそうである。 この 時 川 船の通る水路に 0

ろす監督をした。 浜 、へ行った。そうして荒浜や阿武隈寛文十一年(一六七一)の春、や 寛文十一年(一六七一) 2 11 1 1 () のようすを視察し 船を次々と荒浜 出航させ、 米の生産地 瑞賢もその へ行 いって、]]] 船 船 10 乗 で米をお って荒



瑞賢が改革した輸送航路

10

向

はみ、 かっ 帰 荒浜 瑞賢は船を見送り、 . つ た。 ic たのである 天気 運 ば 四 \bigcirc つの港の 1 () た 1) 米 日を待って出航させた。 は 視察もすませて江戸 自 分は ただちに 陸路で江戸へ 輸ゅ 送さ 船也

積っ

前より少なくてすんだそうである。 送できたのであ 御城米は少し 七月になると輸送船 · の損害もなく、 た。 がが また輸 続 R 送 2 三ヶ月で輸 江 の費用も 戸 完成さ ĺ 到着

せたのは寛文十一年の夏であ

つ

た。

この成功によって瑞賢は幕府

の信任をさ

8

たの

である。

白石はそれま は 奥打 海か 運記に 「これより 後 御 城

米の輸送方法が改められて、すばやくなった。」としるしている。

その後幕府は 代官に瑞賢が開いた方法で輸送するよう命じたのである。

瑞賢 が航路を開く前に、「短期間で安全で確実に」という目標をたてたが、 見事に 達成され 如い

この仕事のあとをたどって見ると、何より感じられることは

そのやり方が

何にも科学的で、 その計画が実にこまやかであったことにおどろくのである。

たの

であっ

必ず成功してみせるとうなずいた瑞賢の自信がわかったような気がする。

瑞 賢 が東 廻り航路を開 いて一休みする間もなく、 幕府が、 山形県最上郡の御城米を輸送する

よう命じたのである。 西廻り航路のことである。

、山形県方面は日本の国の中ではもっとも遠くはなれた地方と言われてい

江戸時代では

こんどの仕事は東廻り航路よりもはるかに遠いのであった。しかし、 瑞賢は前 \bigcirc 仕事 \dot{O} 時

ればみちのり ように、「短期間で、 は短くなるが、 安全で確実に」と今回も同じめあてをおい 流れ の速い 津軽海峡を通り、 太平洋に出てから番所をつくるよ たのであ った。 船を北 進

港が少ないという理由で、日本海を西に進む航路を開くことにしたのである。

次のペ 西 |廻りについては寛文元年(一六六一)頃より御城米を運んでいた商人がいた。そのみちは の図 に示した輸送のしかたで能率がよくなかった。

瑞賢が開く前の米のみちをもう一度、 くわしく見てみると、 酒田から船で福井県の敦賀まで、

桑名まで、敦賀から味 使って運ばせた。 から陸路を滋賀県の 桑名から船で江戸まで、 い塩津まで、 というように五回も積みかえ、 塩津からびわ湖を船で大津まで、 また陸路では牛馬三千頭で、大津から陸路を三重 \bigcirc

大変長い 日数が か か つ た上に、 途中で雨 にぬ れたり してくさる米があり、 また盗難 1 あ つ た

1)

たのであった。



瑞賢が開く前の米のみち

結論を出し、 てある。 航路は二ペ ることを考えたのであ 瑞賢は、 この道ではだめだと ージまえの 船だけで輸送をす 図に る。 示 そ \bigcirc

はその報告を見て西廻 をたてたのである。 日 \bigcirc て調査させ、 下関や岡 本海沿岸の主な港 さっそく手代 山 報告させた。 県 \mathcal{O} 者達を山 四 国 ij つ \bigcirc 香 (か 瑞賢 口 わ]]] 画 県 t

東廻りと同じように、 意見書

を作成し幕府に提出した。

意 見 書

西廻りの航路は東廻りよりも、 困難であるので日本海のことをよく知って ĺ る船乗り

をやと てほ () また四 国 \bigcirc 香川 県、 岡 山 大 阪の船を用い てほ

酒 田に倉庫をたてるので、 費用は幕府で負担してほしい。

の米は川上から川船で港まで運送するので、

その費用は

幕府もちにしてほしい。

最上郡

各港入船 の入港税をなくしてほ ()

を焚いてほ

酒田、佐渡の小木、石川県の福浦志摩の菅島にのろし(かがり火) ()

大阪、 和歌山県の大島、 三重県の方座と安乗、 小の福浦、 兵庫県の柴山、 静岡県の下田に番所をおくので、べん心、島根県の温泉津、山口県の下関、

ぎをはかってほしい。

あとは 東廻りと同じ。

がり火を焚い 瑞賢 幕府 (は船頭達には東廻りの時と同じように、こまかな規則を申し付け、 # ホビジ は意見書の た。 また下関には海中の岩場が多いため、 申したてをことごとく許可した。志摩の菅島では船 輸送船を案内する小舟を用意した。 の通る頃になると毎夜か きまりを守らせたの

であ つ た。

やとった全船に、 二月末日までに下関港へ集合させ、 番所の役人によって酒田 へ出航させた

て あ る。 致な

山

形

県

道が

博物館

記に鶏は

肋を

編とい

う書物

がある。

それによると川船で運んできた御城米は、

砂 地 の上に 野積み したとしるされてい



酒田の御城米置き場 (河村瑞賢庫) 跡

たと

御ご

用等

商す

でてい

事じ

負人にん

であ

るが

1)

府

の命によっ

て直

接出

事に

当たったので、

幕府

L ことが 古 酒 田 砂 をたず わかっ 地であるので ねてそ たのである。 O雨 現場を見て、 が 降 っても、 小 水が 高 () 丘で、

また輸送が のよう 11 こんだそうである。 の従者をしたがえ、 の町役人が出迎えて宿に案内したとある。 瑞賢は ※そのあ 四 また瑞賢は、三月に江戸を出て、 月八日だとしるされ 船は ここに一ヶ月滞在 () 酒 御 田 城 \bigcirc 庄内 米を 日で 幕府の役人の身分で堂々と 瑞賢が 和前 藩は 山なま 船 てい からたびたび贈 \bigcirc 野積 して、 で積みこむ指 町はずれにつくと、 る。 4 米の その のようすを視 酒 生産 時 田に 図 物が 着 などした。 地 五 + () あ 乗 た]]]酒 数 船 i) 田

1+ の役人という身分であった。 れば ならなかった。 だから地方の大名や代官は瑞賢の ている事業に、 協力しな

御城米を満船した船は五月二日に初出帆したそうである。 引き続き何そうかの船も出航した

のであった。



なっ を視察し、大阪から京都をへて江戸へ帰ってい 所をくまなく視察し、 海を乗り切って、 かかっていたところを、二ヶ月で輸送できるように と入港した。約三千二百キロ 瑞賢は五月十日に酒田を出て陸路日本海沿岸の番 数 七月になると、 たのである。 十隻の船は少し 到着したのだった。一年三ヶ月も 御城米を積んだ船が、 の損失もなく、 下関より船に乗って瀬戸 メートル 船 0 の損傷もな 長 江戸へ () 長 内海 次 る。 航 R

酒 府 当時三千両も賞をあたえるということは、 田は一やく日本の酒田港となった。 は 事 業の成功をほ 85 讃えて金三千両をあ

かつ

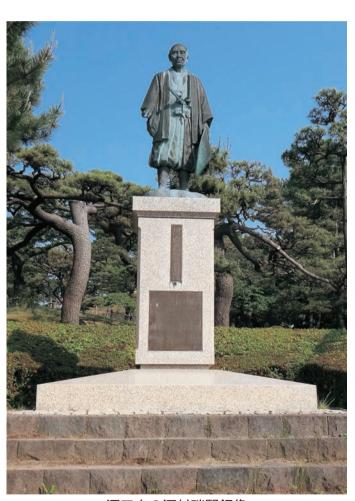
かった。

てなかったといわれる。

瑞賢が東西の航路を開いたことによって、物資の流れがよくなり、 日本の経済が大きく発展

したのである。

地方だけにとどまっていた経済を、 国の経済までに押し上げることにもなったのである。



酒田市の河村瑞賢銅像

土木家として敏腕をふるった瑞賢

※ものごとをやりとげる腕前のすぐれていること

◎越後、高田藩の殖産事業に知恵を貸す

※産業を盛んにし、ものの生産をふやす

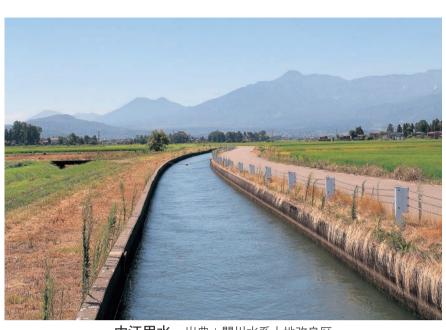
○瑞賢、五十七才、高田藩に招かれて三か月間滞在。瑞賢の指示でその年に直 江津港が、 四年後、 中江用水が完成した。

西 |廻り航路を開いた功績の賞として、 瑞賢は幕府から三千両の大金をもらった。そして土木

家としての瑞賢の名声は全国に知れわたった。

豊かな国(藩)づくりに努力していた。寛文十二年(一六七二)光長は美作に命じて、 の招きで江戸から高 (いて田畑をつくること)して耕地をふやしたり、鉱山の採掘(や資源を掘り出すこと)を進めるなどして、(山やあれた土地を切り拓)して耕地をふやしたり、鉱山の採掘(地中にうもれている鉱物)を進めるなどして、 (でいちばん高い位のこと) 小栗美作は産業を盛んにし、(江戸時代に大名の家来の中) おょうみょきが それから一年あまりたった延宝二年に瑞賢は越後の親藩大名 そのために、土地を切り拓いて水路を通し、作物の栽培を盛んにしたり、あれ地を開墾 |田におもむいた。高田藩は北国では勢力を誇る藩で光長に仕える家老りたった延宝二年に瑞賢は越後の親藩大名(寒の親せきがおさめた藩)、松平光長りたった延穹 その生産をふやすことに力を入れてい 関せきかわ

上流の苗名滝と野尻湖の水源を視察させた。美作はその二つともに水量が多いことに驚き、



出典: 関川水系土地改良区

まず、

たから、さっそく工事にとりかかることになった。

てまとめあげた工事についての考えや計画を美作に申

し上げた。それは、美作を十分納得させるものであ

地のようすなどをくわしく調べあげ、

か苦心しているところであった。

丁重に迎えられた瑞賢は、

高田藩をめぐり歩いて土

それをもとにし

んなにすれば頸城平野の水田の稲

つくりに利用できる

それまで大瀁・大潟地方にたまっていた水が取りのぞかれたので、そこに 中江用水 た。関川の水量は少なく流れにいきおいがなかった それは、 きな船が港へ出入りできるようになった。しかも、 かった。 から河口には土砂がたまり、 らえた河 郷津湾 瑞賢は保倉川を切りかえて関川へ落とし、 それまでの直江津港を一新させるものであ郷津湾(西海岸)の築港(ること)をなしてい 口を水がどんどん流れるようにしたため、 船の出入りもままならな (ること)をなしている。 保 大 と

新

田を開くことができるようになって、

新田の開発が一挙に進むことになった。

倉川

の切りかえで、

48 -

また、 美作は瑞賢の指示にしたがい、延宝二年(一六七四) 中江用水の開さく工事にとりか

かっている。

ずかに三か月であったから工事完成までに瑞賢はたびたび高田藩を訪れ、 条の大江から、板倉・三郷・津有・諏訪・有田の六つの村を貫いて延々と七里ヒッテ゚ ホテネネネ ス いたいらいない すっきょう きゅう かっき かっき かっき かっき かっき した。この用水の区域は、現け、いきおいもつけ、遠くまでゆきわたるようにした。この用水の区域は、現れ 合計)二〇六七四石にもなる。完成までに四年の歳月を費やしているが瑞賢の高田藩滞在はわ メートル)ほどに及ぶもので、それによってうるおう耕地面積は三七〇〇町歩、 信州野尻湖に満々とたたえられている水を水田の灌漑に利用するために池尻川の川にはいるのようで 美作と協議したことと思われる。 この用水の区域は、 工事のようすを視察 現在 惣高が の水上が 十八 はば 全体 丰 村西に を広 口

物資の流通も盛んになり、 これらの事業によって、 城下町高田の繁栄をみることができた。 高田藩は二十六万石であったが内高 (生産産量) は三十六万石をこえ、

◎瑞賢、 畿内の治水工事に敏腕をふるう

※ほぼ、 今の京都・大阪・奈良・兵庫にあたる地方

に今と同じように台風 が荒されるだけでなく、 明暦の大火のことは前にのべたが、 瑞賢、 どで安治川完成。 して江戸に帰る。 の来襲もひんぱんで、その都度、 六十六才、 千戸以上の民家が流されることもめずらしいことではなかっ さらに堂島川、 治水のためのくわしい視察調査を実施。翌年、 次の年、 その後も日本の各地はたびたび大火に見まわれた。それ すべてを任せられて工事再開、 曽根崎川の工 地方に大きな被害が発生し、 事に取りくむがい 二年後完了する。 二十日間は ったん中止 広大な田

六七四年四月一一日 畿内 ·中国 ・濃尾地方に洪水。 ができる。

方面を襲った暴風雨や洪水を歴史年表(「日本歴史年表」河出書房)から次の通りひろうこと

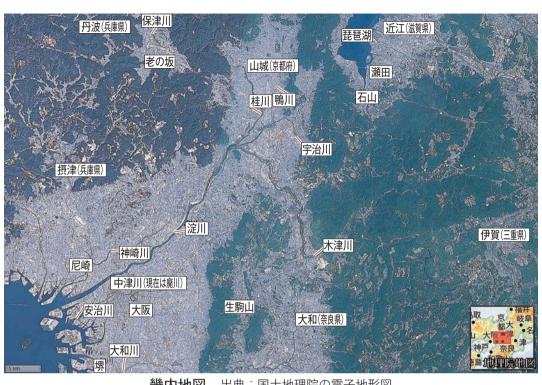
瑞賢が大阪方面の治水工事をはじめた年(一六八四)から十年さかのぼっただけでも、

畑

六月一三日 畿内地方に洪水。

一六七五年二月二〇日 三月一五日 幕府 幕府は大和国 それをやわらげるための方策を考えるように布告した。 は前 年から 【飢饉につき約一万九千人を救うよう代官に命じた。 の水害で民衆の苦しみがはなはだしいことから、

大阪



畿内地図 出典:国土地理院の電子地形図

ニヒン)で食べる物もなく苦しみながら死んで あ \bigcirc 守 た人々も多かった。だから洪水を防ぎ、 民がふえた。そして飢饉 りり、 った。 藩はもちろん、幕府にとっても大きな課題で 災害のたびに、家をすて村から逃げ 幕府は、 内及び関東大飢饉のため米江戸、東海、西海諸国に太一六八〇年八月六日 人々のくらしを守ることは 民家五二 一六八三年二月 〇余戸倒壊。 (イモリや水害などによってイ 稲な 葉石見守正 米心 大 当時 価が風 7 あ 雨 間は かい \bigcirc 田

畑

を

地

休ず

ĥ

諸に国 年 10 大 風 月 雨 五 H 洪すい。

伊"" 予国大 月二 風 雨 七日 あ ij 堤防五二〇

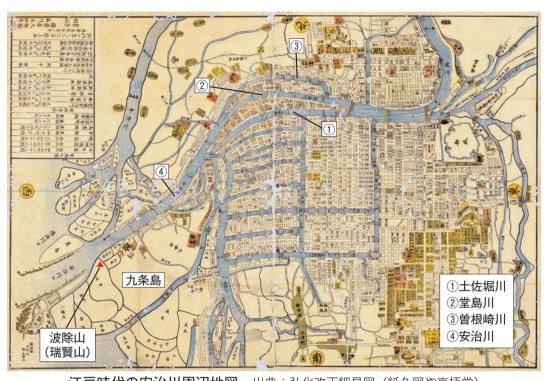
決け

る。

五

淀がお 勢せ駒まなる 砂^しゃが Ŀ 1 見る 図 10 上を堺 多参 守らに 地 ま を船 ず をこえて奈良に行 < 方 進むことができなか ず \mathcal{O} 住み 15 賀だも 瑞 水 れ落ちているようすを明ら で下って大阪 畿され 入り、 吉も 0 賢 とま 川がが 流 の河すじを見まわり、 1 (鴨川) 付きそ を調べた。 わ 流 つ 1 に達し き、 7 \bigcirc 急な保津 および つ 淀がが しその た。 三月 木津川に沿ってくだって宇治へ行き、 また、 そこ \bigcirc 白点 河から 11 1 1 瑞 河 川かわ で老が を か 賢 中なか に行き、 口 治なが をくわ を調べた。 津。 10 下 ÍÌ 川をさか \bigcirc つ 石見守らに て嵯峨に 坂 のため 摂は津っ つい L (前 Ź でたがらがわ 視察: の計 \bigcirc 東の方は、 (前ペ ば ージ 至っ 命じられ ij Ľ 画をたてることに た。 た。 **―**ジ地 地 \bigcirc 神んざき 流 図 大和川を調べ、よその後、淀・鳥 参照)をこえて丹波は そ れをさぐろうとし て畿内 11 1 1 0 図参照) から尼崎 鹿児の飛び 後、 \bigcirc 河か さら 淀を した。 供 御 瀬 ・鳥と . 川t \bigcirc をみ 10 西 1 東北 大 南 出 て まわ 阪 部 と水害に 伏覚を を出る 石江 \bigcirc \bigcirc 前ペ 時 山やま 山 そこから つ 発 道が を調べ、 R を から 稲な 通 て生 苦 1+ 葉ば 1) 海 土ど 地 わ

敷は る \bigcirc 結果を京 1 \bigcirc 呼 見 かぎ 防ぐために 守ら ば よう ょ 田た 1 () ĺ 都 1 7 Z 說 1 瑞 10 持ち帰 賢 11 明 出 うるう五 水は て琵び 切を任せられたと 11 た。 源は の山 琶ゎ () 時 月 ま と 1 湖: 石 見守 々に 11 \bigcirc 水の くり、その月を「うるう五月」といった、、むかしの暦では五月が二回ある場合があり め き 木を植えることと、 あ İ b げ、 Ó 流 6 () そ 2 1 思 うことをうけたまわ \bigcirc 出 図を作っ 考えがききと るロ わ n まで行っ ることに てエ 治なれ 事に た。 どけ ŧ \bigcirc 0 8 ため 10 げ ĥ つ () た。 江 ず、 n 7 戸 \bigcirc \bigcirc 10 九 工 意見を 徹っ 帰 月 事 底に ij 五 11 L た 石見守 日 幕は 調 す 瑞賢は一 府ぶ べ 查 7 10 i を 対 報 実じ 瑞賢に一 石見守 告~ 施し て、 L 任 洪すれば す そ



江戸時代の安治川周辺地図 出典: 弘化改正細見図(紙久図や京極堂)

下

1

一る保証を決定している。

川が治じ川

2

(京都

府

 \bigcirc

北

西

か

b

流

1

川がは

山堂近常淀

城岩江州川

(滋賀

県)

 \bigcirc

湖:

か

b

流

琵ェイ

時

 \mathcal{O}

水

流

()

明

す

n

西

方

向

流れ

る川である。

淀

 \prod

とし

となり、

大阪平

-野を延え

々ん

2

南

ての大河が南東が

から

 \bigcirc

木き

津づ川がわ

な

ど

が合流

る。]]]る。 大坂 の三本の川 そ そ 城近 淀 1 \bigcirc]]] かい 後 土 くで 大 はそこでカー が 阪 曽を佐さ ま \bigcirc 根相堀ほ た 町 また 九条島 近く 崎美川か _ ک 力 11 1 1 堂島 · の 長柄 sk がら かい ブして南へ下る。 \bigcirc 分 東で一つに合わされ 川がわ か 1 7 1 で 西 中なか 分かれるが堂島 津っ 方向を変え そして]]がわ 12 そし 分 か 7 机

丹後守正征 その 後、 ic 瑞賢は 正 会 上げ 月、 () 京都に着き、 幕府の命令で治水工事 江 戸を出 発 所l 司し 代だ真る 字きょう \bigcirc をは 稲な元だ 葉は年れ

決断した。断し、九条 川に大きく影響して水の流そのことがさらに水の流 て水の て海に流れ込むのであるが、 瑞賢は、 いきお 九条島をつっきってい これが新しい川 この実態を見抜き、 が弱まり、 流 れを弱めることになり、 上流, (安治川) づくりの構想であった。 れを悪くし、 きお 海に注ぐ前面に九条島]]] から運んできた土砂を押し流す力を失 いよく海にそそぎ込むように一筋の新し の流 n 豪雨の時 が九条島にぶ の災害のご そして長 があるため、 つかることを改めなけ 引き金にな ĺ 年月の間に上流 川の水がこの島につき当たっ つ てい () そこに土砂が れば 川をつくることを る の堂島川や曽根 Oで ならな あ つ たまる と判は 崎

りでほった土砂で堤防をつくり、 生したのである。 ち望んできた治水工事であったから喜んでその仕事に参加 だので、 て来た。 とよぶことになった。 貞享元年(一六八四)二月十一 てまわ 二十日ほどで新 瑞賢は してい た水東 新し それらの人々をいくつもの班に編成 \mathcal{O} 回 \bigcirc () 転が 誕生]]] ができ上が 日、 速くなったと言われていることからもわかる。 15 松を植えて海上からの目じるしにした。人々は、 よって上流までも流れ 瑞賢は九条島で工事を起した。 つ た。 広く畿内 か うまく仕事が回転するように仕組 \bigcirc 速く 人 R 遠くからも大勢の人々が なっ \bigcirc 願 畿内の人々は、 たことは のこもっ 新 た安治 当 それを瑞賢 時 長 () 集]]] 淀]]] () 間 かく ŧ 7]]] 1 誕な h 待

中な 津っ瑞 賢 の構え 想は遠大であった。 安治川をつくって水流をさばく急所を決めてお () てから、

川がわ どか かわ る工事にとりかかった。

なされ 長紫がら 船 b L ず で なめ 技法をとりい \bigcirc で 都 物 中 方面 ĥ 津 \bigcirc 効果がなかっ 運ば か]]] からはるばると下るうちに、 と淀 10 な んもうまくできなかっ れた。 つ 川に分かれる。 た。 たので、 それが当たり 中津川 瑞賢は思い た。 中 -津川の \bigcirc 淀がが 瑞賢が 水 きっ \bigcirc 11 流 () 川かわ て水 きお れがゆるやかに 工事 幅を広げ \bigcirc i () か 11 いきお かるまでに 強 次第に 1) () かぎ を同 なり、 その大きさを増 にように二つに 何度 方の 淀川の流れがとどこお 淀 ŧ ()]]] ろい 11 流 ろな方 ず。 1 かく 分ける新 そ 浅 楽が れ

堂々と 水の苦しみ しま 積 4 瑞賢 降 つ 流 てい は、 ろしされ n 、る夢が、 る幾筋 その心 から解き放たれ ŧ 地よ 大勢の 次第に現実 OΉĺ () 商 流 た人 人や車が忙が それ れをなが のもの 々が ぞれ 生活 となってい めながら工事に にたくさんの の歌をうたい物つくりに精を出す姿。 しそうに行き交う町、 くことに大きな喜びを感じていた。 船 っつい か 自由 ての自信を深めるとともに、 10 乗り 商 業 X 0 れられ、 町 大阪であっ たくさんの 大阪 それ \bigcirc 町 胸な 品品 な 11 \bigcirc 奥に 物 か を 洪

が]]] 涸ゕか 淀 \prod 1 土砂がたまり、 また 11 曾 大 坂城 根 崎 1]]] か 近づいたところで大きく西にカーブして土佐堀川と堂島 陸 分 地となっている所が多か か れる。 この三つの]]] \bigcirc つ 中 た。 で土 佐 特に堂島 堀]]] 11 水勢は 川 はそ かく 1 あ かぎ つ 削に たが ひどかっ 分か 他 \bigcirc 二本 た。 机 瑞賢 堂島 は

は、それらを一掃して、元通り水が流れるようにした。

j. 議の末、翌年(一六八五年)十一月、再び瑞賢に工事を続けるように命じた。しかも、* る。 てを瑞賢に任すということになった。 は瑞賢や工事を監督する役人がつきそっていたが、 うとする不撓不屈 た大事件のため、 の時、 今までできた工事と今後やらなければならぬことを幕府に強く申し上げたので、 あと 歩というところまできて計画がくずれ、 瑞賢は急に呼び出されて八月、 工事は中止と決定した。 (ず、くじけないこと)(困難にあってもひるま) の人瑞賢を百パーセント信頼したのであった。 幕府は、 瑞賢は 江戸に帰ったが、たまたま稲葉石見守正休が起こし 心身を投げうって任せられた仕事をやりとげよ その監督の派遣をとりやめ、今後は、 夢の消える それを聞いて大変残念がったとい のをがまんできなかっ 幕府 たの わ 今まで n すべ は協 てい

瑞 賢は、 さっそく江戸を出て京都にのぼり、 所司代土屋相模守政直に工事を再開することをしょしだいっちゃとがあるかななさなお

甲し上げ、十二月、工事にとりかかった。

行き来ができやすいようにした。九条島の河岸も改修し、 堂島川下流の土砂を思いきり取りのぞき、どうじまがわかりゅう 曽根崎から福島までの河岸と中之島の北岸に道路をつけたり橋をかけたりして、人や車曽根崎から福島までの河岸と中之島の北岸に道路をつけたり橋をかけたりして、人や車 船の荷の積み降ろしができやすくしただけでな 道路もつけ、 将来への発展の礎をつ

瑞賢はさらに大和川を改修、 次に西の方の神崎川の河口附近や中津川の下流などの水深を深次に西の方の神崎川の河口附近や中津川の下流などの水深を深

くしたり、 また、上流 川底にすてられている石を取りのぞいたり、 の山に植林しなければならない と説いた。 蘆を刈り取って川幅を広げたりした。



現在の安治川

讃えて、 なり、 え、 貞享四年(一六八七)五月、 江戸と並ぶ大都市としてできあがって 本の中で、 () あるにぎやかな町となった。 の報告をした。それらの工事によって、水害は た夢が次第に現実のものとなり、 後になって、 賢が仕事を始 商人やその土地 河岸の新しく開かれた所に蔵屋敷が次第にふ 次のようなことをのべている。 瑞賢が畿内の水害の難をのぞ 新井白石は、「畿内治 めてから四年間で工事は完成 の豪族が集まり住 瑞賢が胸は 瑞賢は 商業 江戸に 河記 の奥で描れる んで、 くのである。 () の町大阪が た功績 ت ح 帰 活気 てそ ()

作物がよくできる地になった。 昔から水害で荒らされてきた田 川のほとりの人々は は、 今では 肥 えて

安治川のほとりにある紀功碑 ある。 績tt か て、 白石のことば通り、

な

功績をたてた人はいただろうか。」

の喜びであり、

人々の

くらしを永久に支えることになる。

昔から今までに、こんなに大き

え

南なれた

て喜び合い、工事をほめる声は野に満ちて

西海諸島からやってくる船も心地よく乗り入れできるようになった。

いる。

]]]

のほとりに住む人々の喜びだけでな

誠に

国家が

11

めて苦しみからのがれ、

種をまき、

作物の栽培に精を出している。人々は、

声をそろ

写真のような大きな紀功碑 (一九一五) 安治川のほとその功績を讃え、大正四年 その功績を讃え、 かわっている。 は今も生きて人々の その偉功を偲んでいるので 大阪 くら の人 々は 1) を建 月

瑞賢

の業

瑞賢、越後の銀山開発に尽くす

辞に指 叶職する。 白峯銀、 山発見、 大福 銀山 時代をつくったが、

病



調査させたところ、切れがせまったので 田 賢 た会津領に銀 銀 か それ 山 の経営を又兵衛からめ 11 \bigcirc う 元ばるる n たので幕府は、 \bigcirc よい 二年 () 報告を受け 鉱源 瑞賢 は上田 \bigcirc 六八九) あ るのを発見した。 L 改め た幕府は 銀山 あ て瑞賢を派は又兵衛との知 又兵衛 げ と川をへだて ただちに 上 田 銀 遣ん 契は約 山 上 2

再び 期限切れが五年の 幕ば 越幸府小 後ごは 期きに、、限ば派は大 と同 時に瑞賢に任せることにした。で請け負っていた上田銀山の終 遣け阪 から 請う L て、 負ぉ 帰 江 戸 た の町なり た町一大八 銀ぎんとなった。 兵、 衛え を

で、 であ 新 と呼んだ。 < 当時の つ 、発見 た。 白峯銀 人 した白峯銀山を幕府が直接経営する銀山とした。 R は 山 上田銀山と合わせて、 という名は瑞 賢 が 0 けたとも言われ 大きな福を生み出すという意味をこめて てい る。 そし それ てその経営を瑞賢に は有望な銀 山であ 任款 大流流 せたの つ 銀山 たの

させたので 瑞賢による経営は、 事 実 瑞賢 銀山 \bigcirc 支配 はますます栄えたと言われ ではじ わずかに三か年であ められ た大福銀 つ たが、 てい 山時代は、 る 瑞 賢 その の後をついだ代官らもそのやり方を続 経営の もっとも盛んな時代であっ

門だ瑞 装できるよう を組 田だの 藩は 銀 何な むことや 賢 \bigcirc \bigcirc 門をあ 不正され ĺ 九十二か 持ち出 銀 1+ 7 山 が村に 経営に Ĺ 鉄砲や刀、 た。 か しを瑞賢は特に警戒 役 ロラ までおふれを出 人に 論な あ たっ を禁止 取 槍などがそ て陣屋 り立 てら ・ばんしょ 火 して、 した。 ń なえつ \bigcirc 用 た二人は 1 かたく禁止 \bigcirc を厳 役 1+ そのため元禄四年 Ź 人に 歌重に き あ 感激し 思 つ した。 たと言わ した。 () きっ て身を投げ また、 7 () 高 n ざという時に (一六九一) 正月十 7 田 悪いことをするために () \bigcirc 町人 出 して の石 11 働 田だ () 七兵され 銀 山 四 全体 日 銀 衛 に、 7 山 仲 浦 か 間

会津領から五三九一人、たいますすることも忘れなに指導することも忘れな 指導する Ш なか に働 ば強 きに 温制的に 来る労働者には農民 集 な めら か 越後領から七七四〇人。 つ れた。 農村 が多く、 かし、 から集まっ 田 それらの人々は 畑 を荒れ て来た人々 元禄四年には、 してしまわぬように、 は、 農業が 元禄三年 会津領四〇四二人、 ひまな時、 一六九 年前で たを怠らぬ、 村 の人 越後領 10 口 に応 11 よう

九三二八人と毎年約一万三千人ほどの人々を動員した。 この人達の食料として、 元禄四年だけ

で御城米一 七二〇石(四三〇〇俵)が運び込まれた。

銀山の中心地の須

代官竹村惣左衛門と交替した。だがななけれたなされませんでする、上田・白田瑞賢は越後に来て、上田・白田・ 上田・白峯銀山発展の基をつくったが、 しかし、その業績は日本の銀山の歴史のなかでも特別に取りあ 三年して、 元禄五年(一 六九二

げてよい優れたものである。

晚点 瑞

- \bigcirc 瑞賢、 ハ十オ、 小笠原島 将軍綱吉 の開発を夢見る。 ロ に 謁 見 新井白石に孫娘の婿になるようすす 旗本になる。 かる。
-)再び、 元禄十二年六月十六日死去。八十二才。 るで 治水工事のため大阪に出張、次の年完成。 治水工事のため大阪に出張、次の年完成。 おすだ おすだ 将軍綱吉に謁見(身分の高い人にお)。 翌年、 不、将軍綱吉に謁見(身分の高い人にお)。 翌年、 次の年完成。三月、 再び将軍に謁見する

小 笠原島にまで、 馳は せ た夢

病を克服-瑞賢 が越後の銀山を三年で辞退して、 の回復につとめた。 江戸に帰ったのは病のためであった。それから約五年

て野見坂をこえる時ながのみざが かった井戸やその屋敷は海岸のすぐ近くにあった。彼は友と野山をかけめぐり、 はそこに大きな夢をえがい つったり貝とりをしたりした少年時代を思い浮かべた。十三才江戸への旅立ち、 病床につきながら瑞賢は、 健 康 め た熊野灘、 た。 少年時代をすごした郷里をなつかしんでいた。 それがさらに広がり洋々たる太平洋へと続いていく、 瑞賢が産湯 郷里東宮を出 また海で魚を 1 彼

1) マンをあたえるすばらし 知れない。 熊野 灘 のはるかな南の海 小笠原島という無人島 取 に小笠原の島 り組み では (その頃は無人島) な 々がある。 () か。 漁業はもちろんどんな産業の開発が可能が 日本にとって小笠原の開発もまた人々 を開拓して、そこに大量の人間を送り 1 口



1)

くのであった。

のだ。」 込む。 黒潮で湯あみし 「天然の宝庫で得た産物が直接、 それによっ た瑞賢の夢は、 て、 大海原へと拡大して 江戸に入ってくる

は、 中で、 海の 国 7 な 「の版図(地図) こまが、 は、一八○○年代だと言われている。 () か 瑞賢 八七五)に初 る。 つ 無人島を開発しようとしたが病のため果たせ た。 瑞賢 \bigcirc 小笠原島に 研 (地図)に正式に入ったのは、 は資 究 その 家 無人 (金を浪人小笠原長啓にあたえて東紫竹越与三郎氏は「河村瑞賢伝」の特によぎ め て明治丸で政府 島とは、 人が住みつくようになっ 小 笠原島であると の役 そして、 明治 人 か 島に 八年 我 た 書

渡ってからである。

その約二百年も前に計画をたて

◎瑞賢と新井白石

学者の研究を尊重したし、学者に憧れの感情さえもっていた。そのため、 成功のかぎは徹底した調査にあると考えていた。だから、 石とのことで次のような話が残っている。 にも支え、自分の子にも学問を学ぶことを大いにすすめた。息子の学友に新井白石がいた。 ればよいか判断した。この考え方には、 しく調べ、あらゆる資料を集め、それをまとめて実際のようすを確実につかんでから、どうす 瑞賢が手がけた事業はすべて成功したとは言えないが、 学者の学問研究に通じるものがある。だから、 事業にかかる前に、できる限りくわ 大成功に終わったものが多い。 学者の研究を経済的 瑞賢は 彼は、

は、 を白石 瑞賢は、 頬に笑みを浮かべ低い声で、 の嫁にしてほしいと思い、 口端に小疵を負うということですね。」 白石を見て将来確実にすばらしい学者になると見込んだ。 白石に孫娘の婿にならないかと持ちかけた。 そこで、 すると白石 自分の孫娘

瑞賢は、 白石の言った意味がわからなかった。はずかしい思いがしたが、

「どういうことだ……」

瑞賢は、いらだち、婿になってくれると約束してくれたら、三千両の大金を渡そうと言っ 瑞賢は、恥を忍んで問いただしてみた。白石は、ただ、静かに瑞賢の目を見ている。

疵は疵です。その疵は、大きくなる一方でしょう。小さな疵は、後で一尺(シチャ)もある 疵になるということです。」 「小さな蛇があって、口のはしに小さな疵を受けたとします。その蛇が、大蛇に育っても た。三千両は、白石の人生が五代続いても得られないほどの大金であった。

るが、将来、学者として名をあげたとしても、「あいつは、金に目がくらんで身を売った やつだ。」といわれると言うのである。 の微動だにしない若者に、まさに呑まれてしまった感じさえした。今は無名の一若者であ 瑞賢は、何かでぶんなぐられた思いだった。三千両の大金にも動かない人間を見た。こ

「わかった。」

瑞賢は、喘ぐように言って、さらに次のことばをつけ加えた。

「わが思慮の浅さを恥じている。」

その後、 瑞賢は白石のことを、「あっぱれな者だ。真底、 あの若者に感動した。」とほめてい

るし、 を讃え後の世に伝えたのである。 学者となった白石は、「奥羽海運記」「畿内治河記」の二つの書物を著わし、 瑞賢の功績

◎将軍綱吉に謁見。旗本の士となる

※将軍一大老一老中一若年寄一旗本

この出発に当たって、幕府から黄金と時服 太夫義通と改めた。再び、年の三月、禄米百五十俵を それまでの瑞賢の功績をほめ、 元気をとりもどした瑞賢は、 禄米百五十俵を賜わり、 幕府の命を受けて、 元禄十年(一六九七)七月、将軍に呼び出された。将軍綱吉は 苦労をねぎらい、いつまでも健康でいるようにと申した。次の 若年寄の指揮を受ける旗本の身分となった。そして名を平れたとよりにき (に着る服)をいただいた。 摂津河内の河川工事を監督することになった。せっつかりのかせん

翌年・元禄十二年(一六九九)二月、工事完成、三月江戸に帰り、 息子の通顕もいっしょだった。将軍は、 工事の完成を喜び、 その功績を讃え、 再び将軍に謁見した。こ 通顕にも

「父に負けぬ業績を期待する。」とことばをかけた。

と思った。 瑞賢は、 病床に伏した彼は 日に日に体力が衰えていくのを自覚していた。気力で回復できる歳でない

うか。 「波除山(瑞賢山)を見たい、どうなっているか、 くずれてはいないか、 松は繁っているだろ

流れる淀川も夢に見た。事業にかかわった多くの人々、瑞賢が育てた優秀な人材、それらのと安治川の人工の山を夢に見るようになった。 と安治川の人工の山を夢に見るようになった。上流の山々の植林が緑豊かに繁り、ませが 建長寺にある瑞賢の墓 旧動り 灘の海の青さを、 かえっていった。 あった。 瑞賢は、 元禄十二年(一六九九)六月十六日、八十二才で 法号うごう (金剛院があった跡) 六月二十二日、 英正院伝籌瑞賢居士」。 そして、 ※法号=戒名。仏教で死んだ人につける名。 鎌倉、 に葬られた。 空の碧を追いながら土に 建長寺の金剛院

 \bigcirc

東陽寺の河村瑞賢追憶碑

東京の東陽寺というお寺は、 このお寺は現在足立区にあるが、 河村家の菩提寺とお聞きしたのでお訪ねした。 寛永十二年(一六一一)より大正時代まで、 浅草の高原町

追

記

寺町に建てられていたそうである。 寺を訪ねると格調のある禅寺であった。 西垣とい

う尼僧の住職に迎えられた。

すと応えられた。 があったそうだが……今は鎌倉の建長寺にござい 河村家のことをお聞きすると、 かつては瑞賢の ŧ 墓は

出ると、真新しくて大きな瑞賢の追憶碑が建立され ていた。それはとてもりっぱな碑だった。 外に出て墓など案内しましょうといって、 境だれた

この碑は住職の献身的な努力によるものだときい

た。

のである) 墓の方へも案内いただいて、お参りさせてもらっ (お墓は東京に住んでおられる河村家子孫のも

合 掌

改訂版追記

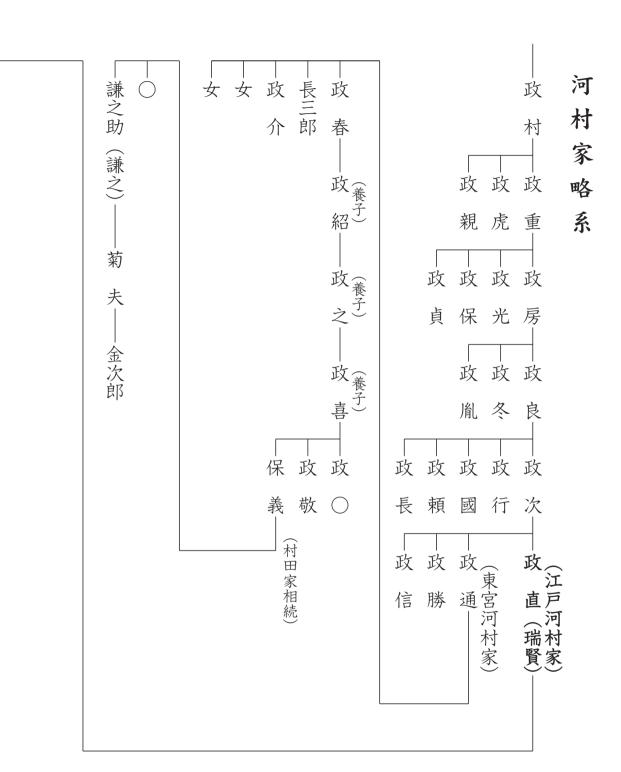
周辺のようすはこの二十年で様変わりしたかもしれないが、お寺のようすは当時の写真とない。 河村瑞賢教科書副読本の改訂にあたって、河村家の菩提寺である東陽寺を改めてお訪ねした。

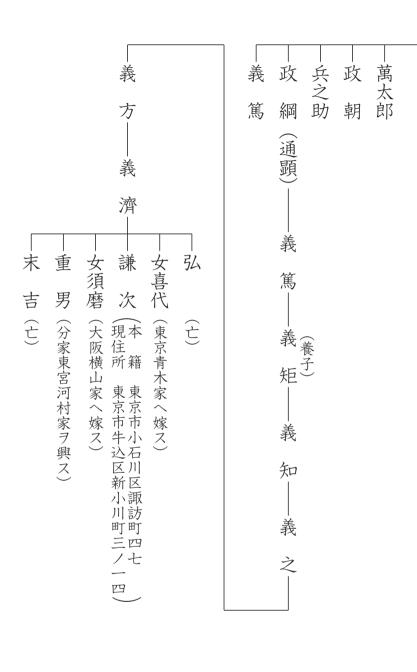


たが、その場で偶然、 感じた。 内でも瑞賢学習として子ども達が瑞賢の功績を学ん る地元の子ども達と出会うこととなった。 また、 るが、 後日、 瑞賢の遺した功績や想いは今も各地で 新川大神宮と河村瑞賢屋敷跡も訪しんかれたいじんぐう 学校の授業で瑞賢を調べ 南伊勢町 てい

脈々と引き継がれている。

時の流れを感じるとともに日本の





昭

和

九年十

月

河

村瑞賢

墳墓

保存会作製

参 考 文 献

河 村 瑞賢 古 田 良 著 吉川 弘文館

)河村 瑞賢 傳 国立 正呉 編 瑞賢遺跡保存会

〇河村 〇人物日本の歴史 瑞賢 考 中井 池 田 信彦 順太 著 著 みちの 小 学

く豆本の会 館

魂 藤本 義 著 集 英

社

河村瑞賢」

歴史の群像6商

○東京都中央区史

〇山形県史

野

史[83]巻248-巻250

飯

田

忠彦

修

他

国文社

翁草1 神沢貞幹 編

校訂 五車楼書店

電子地形図(地名を追記) 国土地理院

〇古地図CD-ROM

弘化改正細見図

 \bigcirc

部加工) 紙久図や京極堂

河村 瑞商人をこえた日本の偉人 賢

平成六年五月一日 発行初 版

監修者 南島町教育委員会

森小 本 山 良 清 道松見

執筆者

浅

井

正

重 _

平成三十年二月四日 発行第一次改訂版 教育長 片 山 嘉 人南伊勢町教育委員会

監修者

南伊勢町教育委員 会

野 刷

印

印刷所

磯

発行者

南伊

勢

町教育委員会

編・著